

入選

できることの恩返し

香川県 東部中学校

二年 佐藤 紀代

七夕の夜だった。出先から帰宅すると、一通の郵便が届いていた。名も知らぬ弁護士事務所からだった。その封を開けた母の顔色が、一瞬でこわばった。

「老朽化による九月末の立ち退き通知」

築後 50 年以上たっているらしい我が家は、立ち退きの危機にさらされたらしい。たしかにきれいな家がいいな、大きな庭ってうらやましいな、と思うこともあったが、なによりもそれ以上にこの土地を離れること＝近所の人バラバラになることの不安の方が大きかった。

祖父が倒れて、母と二人きりの生活になったのが今から 10 年前、私が 4 歳になる年の秋のことだ。母は病院と会社と家の往復、そしてその合間に保育園の送迎をしていた。私の卒園を控えた年の年末、とうとう母が倒れた。

病名は、進行性の乳がん。すぐに手術をしなければいけないことになった。私はお婆の家に預けられることになり、自宅にはあまり帰ってくることはなかった。

母がずっと病室で気にしていたのは、祖父のことと、家の玄関やブロック塀周りにたくさん植えていた草花のことだった。寒さ厳しい季節のこと、花たちはどうなっているだろう、と。

母が退院して、いっしょに家へ帰ると、そこにはたくさんの花が咲いていて、私たちの帰宅を喜んでくれるかのように、風に揺れていたのをはっきりと覚えている。ガーデンシクラメンやパンジーの寄せ植え、私の背丈ほどもある椿の真っ赤な花、どれもが冬の厳しさを耐え抜き、力強く育っていた。

そんな草花たちは、私と母、祖父の留守中は、近所の人たちの手によって水を与えられ、晴れ間のある日中は、軒下から日なたへ移動されて日光を浴びていたと知った。肥料も^{まんてい}剪定もしてくれて、花たちといっしょに近所の人も、私たちの帰宅を待ち望んでいてくれたのだ。

誰かがケガをすると食事を持っていき、夏になるとキュウリやトマトをいただき、お盆が来るとお参りに来てくれたりしている。私が家の鍵を忘れて、玄関先でぼう然としていると、必ず誰かが声をかけてくれて、部屋で母の帰宅まで待たせてくれる。

こんな環境って、ほかにあるのだろうか。私は祖父や母だけでなく、近所の人もいっしょに私のことを育ててくれたのだと思っている。だから今こそは、高齢になった近所の人を支えて恩返しをしたいと思っているのに、この家から引っ越さなくてはいけないなんて……。私にできることはないのだろうか。そんなことを毎日のように考えている。

ほら、今も作文を書いていると、またお婆ちゃんたちの声がする。

「紀代ちゃん！ お勉強しよる～？」

「はい！ 今やっじよるよー！」

私は、お婆ちゃんからいただいた梨をほおぼりつつ、慌てて答えた。